

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16786

研究課題名(和文)性差・国家の狭間の文学：英国女性科学者と英国人妻・娘による近現代日本の表象

研究課題名(英文)Literature in the Interstices: Representations of the Empire of Japan by British Female Scientists and British Wives and Daughters of Japanese Men

研究代表者

雲島 知恵 (Kumojima, Tomoe)

奈良女子大学・理系女性教育開発共同機構・講師

研究者番号：50737434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治期から昭和初期の日本を訪れた英国人女性科学者(Matilda Chaplin Ayrton, Marie Stopes)、また日英の国際結婚から生まれたミックス・レイスの女性(Yei Theodora Ozaki)の旅行記、及び文学作品に注目し、ジェンダー、人種の狭間に置かれた女性達が、文筆活動を通して、制度化された差異の境界線を乗り越える、或いは引き直す作業を描いた。開国後の日本が、ヴィクトリア朝後期の新たな女性観と相まって、女性作家達に新たな言説の場を与えていたことも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、英文学研究の旅行記研究分野において取り残されている女性による日本関連旅行記に注目することで、日本との繋がりが可能にした女性科学者達の学際的活動を明らかにしたこと、またイギリス系日本人女性作家の作品に注目する事で、クリティカル・ミックス・レイス・スタディーズに興味深い一例を提供している事である。

また社会的意義は、女性に高等教育の機会が与えられた初期の女性科学者及びミックス・レイスの女性作家の活動の調査を通して、少数派の活躍における相互支援コミュニティの存在の重要性について改めて確認している事である。

研究成果の概要(英文)：This study investigates travel writing and Japanese-themed fiction by two British female scientists, Matilda Chaplin Ayrton and Marie Stopes, and an Anglo-Japanese female writer Yei Theodora Ozaki, who visited or lived in Japan between 1853 and 1945. It demonstrates their act of transgressing or negotiating institutional boundaries through writing in the interstices of gender and race. It also highlights the newly-opened Japan as a locus where the women writers, encouraged by a more liberal femininity in the late Victorian period, could produce alternative discourses.

研究分野：英文学

キーワード：旅行記研究 ジェンダー クリティカル・ミックス・レイス・スタディーズ トランスナショナル・フェミニズム  
Matilda Chaplin Ayrton Marie Stopes Yei Theodora Ozaki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 英文学女性旅行記研究における日本の不在

①1980年代、90年代の女性学、ポストコロニアリズムの隆盛を受けて英文学研究における一潮流として発展してきた女性旅行者による旅行記の研究だが、日本を舞台とした旅行記の研究は、未だ他地域を舞台とした旅行記と比べ遅れをとっている。Sara Mills や Mary Louise Pratt、Simon Gikandi などのポストコロニアリズムの視座に立った研究書が後続の研究に影響を及ぼす中で、近代帝国主義全盛期に西洋諸国による支配を免れた日本は、英文学研究における旅行記の研究対象からも外れてきた。Isabella Bird の *Unbeaten Tracks in Japan* が翻訳を含め広く研究されていることを除き、Lorraine Sterry の包括的研究 *Victorian Women Travellers in Meiji Japan: Discovering a 'New' Land*、Ronald D. Klein による目録的研究 *Meiji Japan as Western Women Saw It* 以外にまとまった研究は少ない。また、タイトルから明らかなように、双方とも明治時代の日本に限定されたものである。

②本研究代表者は、新帝国主義の支配形式に倣い自ら帝国と化していく日本を、ポストコロニアリズムの研究成果を応用しつつ研究し、さらにジェンダーの差異に着目することで、Homi K. Bhabha が hybridity や mimicry などの概念で行った植民地支配の階層的二項対立(例:西洋/東洋、自己/他者の二項対立における前項の優位)の脱構築に異なった角度から貢献出来るのではないかと考えた。

#### (2) 周縁の経験

①英文学分野での研究は遅れている一方で、日本国内の、特に歴史学の分野においては、西洋旅行家や日本学者による日本旅行記の研究が進められてきた。しかし、その焦点は、人物及び著作の紹介、近代日本像の再構築に終始しており、文学研究的手法を用いた言説分析は遅れをとっているように思われた。また、扱われる文献も、Earnest Mason Satow 等の外交官、Basil Hall Chamberlain 等の日本学者、Lafcadio Hearn 等の作家などの男性の作品に偏っており、Isabella Bird を除いて女性達の作品はその多くが忘却の彼方に追いやられている。

②その忘れ去られた作家群の作品の中でも、特に当時の社会で少数派ながら新しい活動領域を模索・開拓していた女性科学者、英国系日本人、ミックス・レイスの女性作家の旅行記、文学作品に着目することで、ジェンダー、人種、国籍の境界が曖昧になる場を描けるのではないかと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、明治期から第二次世界大戦終戦までの約80年の間に日本を訪れた英国人女性と日本人との間の友愛について、旅行記及び文学作品の分析を通して描き出すと共に、その政治的意義について考察する事を目的として行った。特に、英国人女性科学者、日本人と結婚した英国人女性、また日英の国際結婚から生まれたミックス・レイスの女性の著作に注目し、ジェンダー、人種の狭間に置かれた女性達が、如何に制度化された差異の境界線を超える、或いは変えられるのか、そこに文学がどのように貢献するのかを検証した。また、日英両国の外交関係の変化を背景に、個人間に生まれた情動的関係が、政治的言説に対する反言説を構築する可能性について検討した。先駆的英国女性達が急速な近代化を遂げる日本に見出した活躍の場を浮かび上がらせると共に、国民国家の狭間で生まれた声を掬いとる作業を行い、ジェンダー学、ポストコロニアリズム研究に依拠しつつ、旅行記研究を通して女性科学史、トランスナショナル・フェミニズムの議論に寄与する事を目指した。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究資料の収集

女性科学者として Matilda Chaplin Ayrton (1846–1883) と Marie Stopes (1880–1958)、日英国際結婚、及びミックス・レイスの作家として、Yei Theodora Ozaki (1871–1932) と Iso Mutsu (1867–1930) に注目し、作家毎に出版された書籍の他、雑誌記事、未発表の書簡等を、各地の資料館、図書館などで収集し、整理した。また、作家、発表作品に関する新聞・雑誌記事等も収集し、文筆活動の背景を明らかにした。

① Matilda Charlotte Ayrton : *Child-Life in Japan, and Japanese Child Stories* (1879) を主要テキストとし、大英図書館及びオックスフォード大学のボードリアン図書館で、雑誌・新聞記事の収集、自費出版の家族史、また、国立国会図書館で日本アジア協会の機関誌を収集し、彼女の日本滞在中、またその後の活躍の後を追った。

② Marie Stopes : *A Journal from Japan* (1910) を主要テキストとし、大英図書館に保管されている Stopes Papers の中から日本人と Stopes との間の書簡を収集した。

③ Yei Theodora Ozaki: *The Japanese Fairy Book* (1903)、*Warriors of Old Japan, and Other Stories* (1909)、*Romances of Old Japan* (1919) を主要テキストとし、日英米の雑誌に Ozaki が発表した短編作品、

Ozaki に関する新聞・雑誌記事などを収集した。その他、国立国会図書館、ハーバード大学のホートン図書館、ニューヨーク公共図書館などに所蔵されている彼女と米出版社との間で交わされた書簡も収集した。

④ Iso Mutsu (Gertrude Ethel Passingham) : *Kamakura: Fact and Legend* (1918) を主要テキストし、Mutsu に関する新聞記事等の収集を行った。

## (2) 研究資料の分析

上記の通り集めた図書及び資料を、ジェンダー理論、ポストコロニアル理論、及びクリティカル・ミックス・レイス・スタディーズの理論・問題意識を援用しつつ分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

#### ① 人種・国籍の中間地帯

Yei Theodora Ozaki の文学活動を、日本人の父と英国人の母を持つ彼女の出自の複数性に注目し分析することで、彼女が日英両帝国の恣意的人種言説に翻弄されつつも、文筆活動を通してその言説を利用、またそれに挑戦し、作家としてのキャリアを築き上げていたことを明らかにした。

Ozaki は日本のメディアでは英国育ちの他者性を強調され(1905年10月11日の朝日新聞記事は、当時東京市長の尾崎行雄と Ozaki との結婚式に際して、Ozaki を「英子新夫人は幼少時代より外国にありて頗る英語に堪能にて日本語の如きは殆んど三才の児童と同じく其操縦頗る不堪能なりといふ」と紹介している) その一方で、彼女が執筆活動の初期においてエッセイを数本発表した英国の月刊雑誌 *The Wide World Magazine* においては、繰り返し“Japanese lady”として紹介されている。<sup>1</sup> 大英帝国における異人種間の混血に対する差別、また、日本における欧化主義時代の「人種改良論」から、後の領地拡大主義、国粋主義に伴う民族間の優劣に関する言説、純血思想、優生学へと繋がる流れの中で、Ozaki は日英両国の所属外、言わば人種言説の割れ目に追いやられてしまう。<sup>2</sup>

このような複雑な時代を背景に Ozaki のアイデンティティの模索を助けたのが、文筆活動であった。英語圏読者に対して、文章のみならず、漢字で名前の記名された証書や写真などの視覚イメージを上手く利用し、日本人として自己を提示、“act ethnic”し“pass”することで、日本人としての自己を主張することが可能となった。<sup>3</sup> また、国立国会図書館に所蔵される井上馨宛の手紙の中で、Ozaki は彼女の日本関連作品について“*I have the patriotic ambition to use my little talent*”と書いており、日本人に対しては文筆活動を通して彼女の愛国心、所属意識を強調した。<sup>4</sup>

#### ② 文学的外交

Ozaki が執筆活動を通して、日本人、特に日本人女性に関するステレオタイプを覆そうとしていたことも明らかにした。この意図については、*Warriors of Old Japan and Other Stories* (1909) に“*Madame Yukio Ozaki: A Biographical Sketch*”として掲載された Mary Hugh Fraser による Ozaki に関するエッセイからも明らかである。更に、ステレオタイプとは異なる日本人女性像を英米の読者に提示することで、日本に関するイメージを好転させようとする、言わば文化外交的な活動を行っていたことも明らかにした。

日露戦争の直後には、英雑誌において日本の武家の女性に関する物語3本(“*Aoyagi: The Story of a Japanese Heroine*” [1905]、*“The Tragedy of Kesa Gozen”* [1906]、*“Tomoye Gozen: The Warrior Maiden”* [1907]) を発表し、日露戦争の勝利を武士道と結びつけると共に、新渡戸稲造の『*武士道*』や Edwin Arnold の描く日本人女性とは異なる、個性、自己の意志、情熱を持った日本人女性像を提示した。またこれは、*Madame Butterfly* や *The Geisha* などの舞台作品、ヴィクトリア朝の旅行記などを通して広まっていたゲイシャ、ムスメなどの日本人女性のステレオタイプを根本的に覆すものであった。

また1910年以降は米雑誌での執筆活動が目立つようになる。これは、1907年の日米紳士協約以降の日米関係との関連で考えると興味深い事実である。1910年に排日感情の強いカリフォルニアで発刊されていた雑誌 *Overland Monthly and Out West Magazine* で Ozaki が発表した“*Ono-no-Komachi—The Japanese Poetess: Fragments of a Romantic Biography*”は、日露戦争以降 *Warriors of Old Japan* までの武士或いは武家の女性に焦点を当てた作品とは異なり、平安時代の上流階級の女性詩人小野小町に焦点を当て、“*fragile and beautiful woman*”として日本を提示し、当時現地で広まりつつあった低賃金労働者としての日本人像に対抗しようとしたと考えられる。

このように、Ozaki の作品は、当時の国際社会情勢における日本の立ち位置と大きく関わっており、結果的にプロパガンダ活動となりうる側面があったことは否めない。また、階級問題に無自覚で、日本人移民の苦境への視点が欠けていることも注記しておきたい。

#### ③ 女性のネットワーク

Ozaki については、上流階級の父、英国との繋がり、また政治家である夫を持つことで与えられ国際的人脈と語学力を活かして、日英米の女性達の国際的ネットワークを構築していたことも明らかとなった。ワシントンの桜の植樹の際には、大統領夫人 Helen Herron Taft に手紙を送っている。<sup>5</sup> 更に、*The Japan Times* や朝日新聞の記事から、1921年には Tokyo Women’s Club を通して

文芸活動を行っており、この活動に与謝野晶子もゲストとして参加していたことが分かった。<sup>6</sup>また 1927 年から 1930 年頃にかけては英米女性作家を中心とした Tokyo Penwomen というグループを立ち上げ活動していたことも判明した。<sup>7</sup>1927 年 6 月 28 日の朝日新聞の記事からは、Tokyo Penwomen のメンバーと野上弥生子、宮本百合子などの日本人女性作家との交流会が開かれたことも分かる。また、野上弥生子の日記からは、この会を設定したのが、朝日新聞社初の女性記者、竹中繁であったことも分かった。<sup>8</sup>1914 年 7 月 27 日の朝日新聞の記事からは、Ozaki と九条武子、更には、米女性詩人 Frances Hawks Cameron Burnett との繋がりも見えてきた。Ozaki の *Romances of Old Japan* の中の 2 作品（‘The Lady of the Picture’、‘A Cherry-Flower Idyll’）内で使用されている日本語の長歌を英詩に訳したのは、“my friend”として注の付けられた Iso Mutsu の手によるものである。<sup>9</sup>このように、Ozaki の研究を行う中で、20 世紀前半に文学の繋いだ日英米の女性達のネットワークが明らかとなった。

女性のネットワークというテーマは、女性科学者たちの活動を検討していく上でも有効な切り口であった。Marie Stopes が日本滞在中に立ち上げた London University Union in Japan や Debating Society、Matilda Chaplin Ayrton の Edinburgh Seven、Somerville Club での活動、また日本アジア協会での活動及びウェールズの男女共学に関する提言などから、先駆的個人を支えるネットワークの必要性が繰り返し浮かび上がってきた。男女の間の協働に Stopes、Chaplin Ayrton 共に重きを置いていることも興味深い。Stopes は *A Journal from Japan* の序章において“*There is further a quality in a pure and intellectual friendship which comes to it only when the friends are man and woman*”と書いて男女の知的友愛の重要性を強調し、Chaplin Ayrton は 1879 年にフランス帝国大学のパリ医学部に提出した自身の博士論文の献辞として「1871 年以降、何度も『自由、平等、博愛』という言葉が単に壁に彫られたものというだけではなく、我々の学校の精神でもあると証明してくれたパリ医学部の学生に」と書き、共に学んだ学生達に論文を捧げている。<sup>10</sup>後者については、Chaplin Ayrton が Edinburgh Seven の一員として経験した Surgeons’ Hall riot（1870 年 11 月 18 日に解剖学の試験を受けるために会場である Surgeons’ Hall に向かった Edinburgh Seven を男子学生が罵詈雑言、ごみを浴びせ、建物に入れないように門を閉めるなどして邪魔した事件）などの経験と照らし合わせると重みを増す。

Chaplin Ayrton と Stopes が日本（滞在期間以降を含め）で女性達と築いたネットワークについても明らかになった。Chaplin Ayrton については、日本滞在中に日本初の助産婦対象の授業を開講していたことが知られていたが、その授業に関して本人が *The Scotsman* に寄稿した記事や、同時代の英国人がその活動を英国での女子医学生問題と絡めてどう受け止めたかなどを窺い知れる雑誌記事を *The Examiner* 誌で確認した。また、Stopes については Stopes Papers の中に、後に日本女性初の理学博士となる保井コノが 1908 年 2 月 7 日に Stopes に宛てて出した手紙が残っており、その内容から、Stopes が保井に最新の実験器具の使い方を教えたことが分かる。また、上に挙げた Ozaki が文芸活動の一環として関わっていた Tokyo Women’s Club は Stopes が日本滞在期間に立ち上げた Debating Society を前身としており、国際的な女性のネットワークへと発展した事実は 20 世紀前半の日本の女性達の国際活動を考える上で重要である。Club に直接確認したところ、残念ながら活動の詳細な記録は残されていないとの回答であったが、*The Japan Times* の 1929 年 5 月 14 日の記事に 21 周年記念の際にロンドンの Stopes から電報が届いたこと、日本人初のメンバーが津田梅子だったことなどが書かれており、また 1937 年 5 月 28 日の記事にも Stopes を含むロンドン在住の元メンバーから Club に向けてメッセージが届いたことが記されており、当時の英字新聞を利用することで、Club の活動内容を垣間見ることができる。更に、Stopes Paper の中に残る 1951 年 11 月の英外務省から Stopes への手紙、同 12 月の奥むめおから Stopes に宛てて書かれた手紙から、Stopes が渡英中の日本人女性訪問団を自身のクリニックに招待したこと、奥をはじめ、山川菊枝、田辺繁子などの戦後日本の女性の躍進を語る上で重要な人物がその訪問団のメンバーであったことが分かる。Stopes Papers の中には天野文子からの手紙も残っており、天野が Stopes へ『日本産児計画情報』への寄稿を求めていたことなどが明らかとなった。戦後日本のバースコントロールの発展に Stopes がどのように関わったのかを知る上で、大変興味深い資料である。

最後に、Chaplin Ayrton、Stopes が日本滞在経験を通して文学、人類学などの専門分野外での活動に挑戦していることも興味深い事実として挙げておきたい。日本アジア協会の発行誌 *Transactions of the Asiatic Society of Japan* からは、Chaplin Ayrton が協会の揺籃期における主な活動メンバーであったことが分かる。1877 年 1 月 24 日の例会では、Chaplin Ayrton の論文“*Japanese New Year Celebrations*”が Earnest Mason Satow によって読まれたが、これは、協会の例会で発表された女性による初めての論文であった。この他、Chaplin Ayrton は 1877 年 5 月 10 日のエジンバラの植物学会の例会にも“*Plants Used in New Year Celebrations*”という論文を寄せている。また、Stopes は、帰国後に能に関する解説及び翻訳書 *Plays of Old Japan* (1913)を桜井錠二との共著として発表している。このように、西洋社会にとって未知の世界であった明治日本は、先駆的女性科学者達に新たな知の構築のための活躍の場を与えた。

## (2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

①先行研究の少ない日本に関する旅行記を、文学研究の手法を用いて分析したことは、文学研究の旅行記研究分野における貢献である。また未出版の一次資料を掘り起こせたことは、後の研究者の助けともなるであろう。日本語資料を英語論文で紹介することで、海外の研究者の助けに

もなると期待している。

②Ozaki に関する研究を通して、先行する質的研究が皆無とも言える明治時代の日英ミックス・レイスの個人の体験を、出版作品や当時の新聞、雑誌記事、書簡等を通して、特に本人の声を拾いつつ明らかにしたことは、クリティカル・ミックス・レイス・スタディーズの分野への重要な貢献であると言える。

### (3)今後の展望

①Ozaki の研究を通して浮かび上がってきた、Tokyo Penwomen など、戦間期から第二次世界大戦中の日英米女性作家達のネットワークを引き続き調査していく予定である。トランスナショナル・フェミニズム、文学、女性の政治参加について、示唆と指標を与えてくれる事を期待する。

②尚、本研究の Chaplin Ayrton と Stopes に関する研究成果は、オックスフォード大学出版局より出版予定の単著 *Victorian Women's Travel Writing on Meiji Japan: Feminine Hospitable Friendship* (仮題)内で、また Ozaki に関する研究成果は、Palgrave Macmillan より出版予定の共著 *Pacific Gateways: English Literature and the Pacific Ocean, 1760–1914* (Laurence Williams 編)内の一章“Yei Theodora Ozaki, Anglo-Japanese Identity, and Female Literary Diplomacy”として発表予定である。

### <引用文献>

1. Yei Theodora Ozaki, “How a Girl Climbed Fujiyama,” *Wide World Magazine* (March 1899): 561.
2. 高橋義雄, 『日本人種改良論』(東京: 石川半次郎, 1884), 116; 嶽本新奈, 「『<異・外国人>との子供』研究の整理と『からゆきさん』事例」, 『歴史評論』815 (2018): 9–13.
3. Erving Goffman, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity* (New York: Simon and Schuster, 1986), 74; Dana Grosswirth Kachtan, “‘Acting Ethnic’—Performance of Ethnicity and the Process of Ethnicization,” *Ethnicities* 17, no. 5 (2017): 708.
4. Yei Theodora Ozaki to Inoue Kaoru, 7 September 1914. 井上馨関係文書, 国立国会図書館, 東京.
5. Yei Theodora Ozaki to Helen Herron Taft, 26 February 1911. William H. Taft Papers, Library of Congress.
6. People and Events, *Japan Times and Mail*, October 18, 1921.
7. “Madame Ozaki Opens Home at Zushi to Tokyo Penwomen; Poetess is Topic of Talk,” *Japan Times and Mail*, June 3, 1930; 「内外女流作家の顔合わせ」, 朝日新聞, 1927年6月28日, 聞蔵IIビジュアル.
8. 野上弥生子, 『野上弥生子全集』, 第2期第2巻(東京: 岩波書店, 1986), 84–86.
9. Yei Theodora Ozaki, *Romances of Old Japan: Rendered into English from Japanese Sources* (London: Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent & co., 1919), 125, 243.
10. Marie C. Stopes, *A Journal from Japan: A Daily Record of Life as Seen by a Scientist* (London: Blackie & Son, 1910), xiv; Matilda Chaplin Ayrton, “Recherches sur les dimensions générales et sur le développement du corps chez les japonais,” PhD diss., (Imprimerie Felix Malteste, 1879), 3.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Tomoe Kumojima
2. 発表標題 'A daughter of the East, a Child of the West': Yei Theodora Ozaki, Anglo-Japanese Miscegenation, and Feminine Literary Diplomacy
3. 学会等名 Pacific Gateways: International Symposium on English Literature and the Pacific Ocean, 1760-1914. (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoe Kumojima
2. 発表標題 Gothic Sisterhood: Victorian Women Travellers and Transnational Empathy in Ghostly Japan
3. 学会等名 Gothic Spaces: Houses, Landscapes, Bodies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考